1969.10.16 明治大学新聞

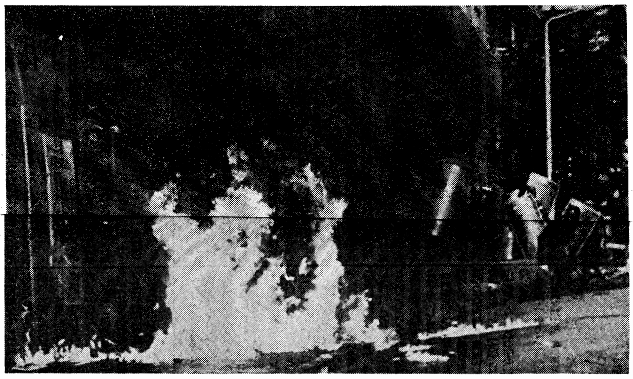
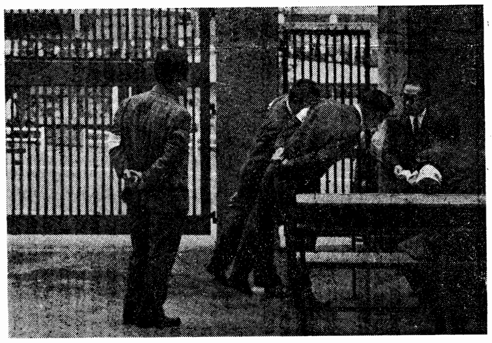
メイダイ・アングル

大学立法粉砕・六項目要求をスローガンに六月二十二日から全学バリケードストに突入した本学の紛争も、十月九日の大学当局による機動隊導入・ロックアウトにより、急拠局面は転回した。各校舎を闘争本部に占拠していた学生は全員撤退し、机・椅子・ロッカーのバリケードはベニヤ板のカコイに一変した。

通用門には教職員が交代で当番にあたり、駿河台本校には連日教職員一五人づつ三〇人が本館・七・十一号館に泊り込んでいる。

さながら〝明大砦〟の観を呈するその内では、雨ざらしにあった各事務室の器具を職員が点検し、整備を始めている。管財課の話しでは、学園内の整備、破損品の購入・修理さらに研究資料の補充など億単位の復旧費を要するという。

まだ本格的には作業は進んでいないが、学園内が旧来の姿にもどるのは、相当な期間がかかるものとみられている。まさに――つわものどもの夢の跡――である。

カット左は、大学院の塔の上に追いつめられた学生。カルチェ・神田にそびえるこの塔は高さ四三・八メートル。四畳半の広さ。六人の学生はこの上で、デモを行ない、そして、最後のインターを歌った。**右**は燃え上がった火災ビン。**その下**は大学院から見下したマロニエ通り。業者がバリケードを撤去し、この後すぐベニヤ板を打ちつけた。**その左**は大学院の中を整理する教職員。**右下**は本館正門の検門風景。